



ハリウッドの映画製作者であり、スワミの貴重な映像の数々を撮影した米国の帰依者、リチャード・ボック氏が、初めてスワミのインタビューを受けた時の体験談をご紹介します。月刊『サナータナ・サーラティ』1980年8月号からの転載です。

空中から . . .

アシュラムに到着する頃までに気分は爽快になっていた。私には、それまで自分が病気だったことが信じられなかった。インタビューの中で、ババは私にヴィブーティを物質化し、シャツの襟を開いて胸に塗ってくれた。私はババに何も言わなかったが、次にババが述べたのは、私の心臓に損傷はないということだった。（私は9月に発作を起こし、11月にはインドにいた）

「良い心臓です。心配はいりません。私がここにいるのになぜ恐れるのですか？」
それからババは私に指輪を物質化してこう言った。

「これを身につけなさい。私はいつもあなたと共にいます」

その指輪にはババの肖像がついていた。それは私にババとのつながりをもたらし、私の人生は変わり始めた。それはとても自然な成り行きだったので、そのことに驚いてい

る暇さえなかった。私はババがそれを行うということを聞いていた。はっきり言えば、それは私が懸念していたことの一つだった。アシュラムに行く前、私はインドラ・デーヴィ（スワミの古参の帰依者であるヨーガ教師の女性）に「私は奇跡以外なら何でも受け入れることができる」と言っていた。私はラーマクリシュナ・パラマハンサが、

「あなたを誤った道に進ませるシッディ（超自然的な力）に気をつけなければならない」と述べたことを本で読んでいた。だから、その力を見せびらかすのは至高のレベルの顕現ではなく、何か利己的なものではないかと恐れていた。それゆえ、私はこの力を見せるババの動機を疑っていた。しかし、ババに近づき、それを経験し始めた時、私はそれがババにとってごく自然なことであり、背後にある理由が正当なものであることを悟った。ババは別の空間（宇宙）から来ているのだとわかった。ババは何かになろうとしていたのではなく、すでにそれであった。だから、ババを損なうことのできるものなど、何もなかったのだ。

ババは、人々が自ら生み出した狂気から、人々を光の中へ導こうとしてここ（地上）にいる。ババは、ババに会いたいと彼の加護の下に来た人は誰であれ、その人を助けるために何でもしようとしている。それがババの使命であり、ババがここ（地上）にいる理由だからである。西洋人にとっては、普通、自分が閉じ込められているこの物質界から自由になり、一切は科学的に解明できるという考えを脱するには、何か驚くべきことが必要である。だからババは時節はずれのものを創り出したり、厳正な自然の法則のように見えるものを破ったり、いわゆる奇跡を創造したりする。知的世界に染まっている人には、それを扱うのはとても難しい。知的な人々はそれに直面し、疑問を持たねばならない。そして、その唯一の答は神である。しかし多くの場合、知的な人々は神にたどり着くことができない。というのは、それは彼らに作用（影響）しないからである。

神を理解しなくても、神を受け入れることのできる愛と信仰を持つ人は、純真な心の持ち主である。一方、神を受け入れる前に神を理解しなければならない人は、知識人（知性を重んじる人）である。しかし、神を理解するのは不可能なことだ！ これまで何百万もの人々が、それを解明しようとして心のバランスを失ってきたのは、それが不可能だったからである。そして、時間が停止するような行為は、人々を立ち止まらせ、一時休止して考えさせるのである。

私を仰天させたのは指輪の物質化ではなかった。それは、インドラ デーヴィが癒しの灰であるヴィブーティをもう少しもらえないかとババに頼んだ時に起こった。インドラは最初にもらったヴィブーティを、すべて人々に分け与えてしまっていたからである。

ババは「わかりました」と答え、私が見ていると手をくるくる回し、それから何かを受け取るかのように両手を持ち上げる。すると、空中から4インチ〔約10センチ〕ほどの高さの壺が現れ、ババの両手の中にストーンと落ちてくる。これを見て、私は言う。「それは手品ではない…ババの袖から出てきたのではない…別の何かだ！」

それから、ババはその壺の蓋を取り、一枚の紙きれの上に中の灰をすべて取り出す。そしてもう一度、壺いっぱい量の灰を注ぎ出し、全部でその壺に入る二倍量の灰を物質化する。次に、その半分を壺に戻し、残りを近くにいる人々に分け与える。あとは小さなハンカチの袋に入れて、インドラ与える。ババはそれに触れて、こう言う。

「さあ、もうこれは無尽蔵ですから、あなたが使い切ることはないでしょう」

そう！インドラはこれまで10年間その壺を持っているが、まだその壺からは灰があふれ出ている。そして、彼女はそれを何千人もの人々に与えてきた。それゆえ、それは私にとって指輪よりずっと大きな奇跡だった。なぜなら、私は神の概念に軽い気持ちで手を出して宗教を勉強してきたが、神を体験したことはなかったからだ。あのババとの体験の後、神が存在するか否かということは、もはや私には問題ではなくなっていた。

